

### 1435 抗てんかん剤投与時の血中 Free thyroxine 値の変化

鈴木義信、菅間範子、平岩正基、鈴木 仁、  
下田新一（獨協医大、内分泌） 森 克己、  
宮坂松衛（獨協医大、精神神経）

Phenytoin、Carbamazepin、Barbiturates 剤単独、あるいは併用投与を5～200ヶ月間うけているてんかん患者31名（6才～58才）を対象として血中 $T_4$ 、 $T_3$ 、 $RT_3U$ 、free $T_4$ 、TBG値について検討を行なった。 $T_3$ 、 $RT_3U$ 、TBG値はほぼ正常値を示したが、 $T_4$ は $6.20 \pm 0.80 \mu\text{g}/\text{dl}$ 、free $T_4$ は $0.88 \pm 0.31 \text{ng}/\text{dl}$ と共に正常者に比して有意の低値を示した。各種薬剤投与期間、投与量について相関の有無を検討すると、Phenytoin投与量のみ $T_4$ およびfree $T_4$ と負の相関関係を認められた。

### 1436 4℃法によるSPAC- $T_3$ 摂取率測定、およびこれを用いた遊離型サイロキシンの基礎的検討および臨床的評価

吉村房子、石原明、小野理喜代、湯川三希子、吉政康直、山田秩、浜田哲（天理病院、RI、内分泌）

先にわれわれは、抗 $T_3$ 抗体固定試験管法による $T_3U$ 値は、著しい高 $T_3$ 血症では逆に減少すること（逆転現象）を見だし、これは血中 $T_3$ がインキュベーション中に解離して抗体に結合し、標識 $T_3$ が抗体に結合するのを阻害するためであることを明らかにした。これを是正するために、4℃で $T_3U$ を行う方法を考案し、その基礎的および臨床的検討を行うとともに、本測定値を用いた遊離型 $T_4$ 指数（FT $_4$ I）を算出し、平衡透析法によるFT $_4$ 値と比較した。

4℃ $T_3U$ 値は、SPAC- $T_3$ キットを用い、4℃で60分間インキュベートした。3濃度の $T_3U$ 値のintra-assayのC.V.は2.1-6.2%、inter-assayは2.0-3.3%であった。血清に $T_3$ を800ng/dlまで添加しても測定値に影響はみられなかった。4℃ $T_3U$ 値はレジストリップを用いた $T_3U$ 値と極めて良好な逆相関（-0.912）を示し、甲状腺機能亢進症および低下症との重なり合いが室温法より少なかった。4℃ $T_3U$ 値を用いたFT $_4$ Iは平衡透析法によるFT $_4$ 値と良好な正相関（+0.930）を示した。本法は簡便で臨床上有用と結論された。

### 1437 トリヨードサイロニン測定法の比較検討

稲葉妙子、黒田彰、矢田部タミ、千葉一夫、村田村田啓、山田英夫（養育尉付属病院 核放部）

従来より、いろいろのキット間の比較検討には、回収率、希釈試験、再現性、未知検体測定値の比較などが行なわれているが、今回はさらに、いわゆるinternal methodを加えて、精度管理の立場からも検討した。

使用したキットにはRIAⅢ、コーニング $T_3$ 、スパック $T_3$ 、ガンマコート $T_3$ である。標準測定は、いずれも三重測定で行ない、カウントと分散の関係は $\text{Log}(\delta^2 + 1) = \text{LOGA} + \text{J} \times \text{LOGY}$ を用いて検討した。また回収率、希釈試験、未知検体測定値の比較も行なった。

カウントと分散の間にはRIAⅢで0.69、コーニング $T_3$ では低く、SPACK $T_3$ では0.72、ガンマコート $T_3$ では0.78の相関が得られた。いずれも低濃度部分で分散が大きい。回収率はコーニング $T_3$ が最も良い結果を示し、トラベノール $T_3$ では低濃度部分で悪かった。しかし、希釈試験は全てのキットで良い結果を示した。また未知検体の値の比較はRIAⅡとの関係で検討したが、いずれのキットもRIAⅡに対してやや低い値を示す傾向があったが、両者間の値の相関は良好であった。

### 1438 thyroid test, microsome test と抗サイログロブリン抗体RIAkit との相関について

森田新二、隈 寛二（隈病院）、玉井 一、大迫範行、吹野 治（九大、心内）、長滝重信（長大、一内）

現在臨床的に広く用いられているthyroid test, microsome test と抗サイログロブリン抗体RIAkit との相関を検討した。対象はバセドウ病患者でthyroid test, microsome test 共に陰性の48例といずれか一方が陽性である68例の計116例である。

- (1) thyroid test 陰性（ $T \ominus$ ）、microsome test 陰性（ $M \ominus$ ）の48例中抗Tg抗体を認めたのは1例であった。
  - (2)  $T \ominus M \oplus$ である症例34例中、microsome testのtiterが明らかに高値を示しても抗Tg抗体が陽性であった症例は1例も存在しなかった。
  - (3)  $T \oplus M \oplus$ 例でそのthyroid testのtiterが2000倍の症例が4例であったが1例にのみ抗Tg抗体を認め、microsome との間に相関はみられなかった。
  - (4)  $T \oplus M \oplus$ 例30例ではthyroid testのtiterが400倍以上でありそれらの症例のすべてに抗Tg抗体が存在した。
- microsome testの値が明らかに高値を示してもthyroid testが陰性例では抗サイログロブリン抗体は検出されず抗サイログロブリン抗体のRIAkitは特異性の高いものである事が示唆された。